様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　８ 月 ２９ 日現在

機関番号：３７５０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０２０２０

研究課題名（和文）インドにおける児童養護施設出身の若者による「家族」の想像/創造

研究課題名（英文）Imagining/Creating "Family" by Youth from Foster Homes in India

研究代表者
針塚　瑞樹（Harizuka, Mizuki）

別府大学・文学部・准教授

研究者番号：７０６２８２７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：研究の目的はインドで社会的養護を受けた若者の家族イメージと家族関係を明らかにし、若者のアイデンティティ形成における「家族」の意味を考察することである。1980-90年代に生まれた世代は、NGOの社会的養護を通じて自律的な主体形成の教育を受けていた。このことは施設出身者のアイデンティティと家族の形成に影響を及ぼしていた。
　施設を出た若者の多くは、施設出身者らから成るNGOのコミュニティでケア関係を維持していた。移行期の若者にとって、自らの背景をオープンにできるコミュニティは、アイデンティティ形成上重要な意味をもっていた。また、若者らには家族に関する既存の規範を相対化する意識や実践がみられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、1980-90年代に生まれNGOの社会的養護を受けた若者のアイデンティティ形成における「家族」の意味を考察したことである。社会的養護を経験しアイデンティティ形成において重要な意味をもつ家族に頼ることができない子ども時代を過ごした者にとって、家族に代替する施設出身者とNGO関係者から成るコミュニティに着目し、アイデンティティ形成におけるその重要性を示唆した。
また、研究の社会的意義としては、社会的養護を受けた若者の移行期における困難の特質を明らかにし、若者にとって必要なケア関係の基盤として施設出身者とNGO関係者から成る共同的なコミュニティの可能性を示唆した点である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the study is to identify the family image and family relationships of young people from foster care in India and to examine the meaning of “family” the identity formation of young people.The generation born in the 1980s and 1990s experiencing foster care in NGOs was educated as subject of self decision making. This has influenced the identity and family formation of those who came from institutions.
Many of the young people who left the institutions maintained care relationships in NGO communities composed of people from the institutions. For youth in transition, the NGO community was important for identity formation because it allowed them to be open about their backgrounds. These young people showed an awareness and practice of relativizing existing norms of family formation.

研究分野：文化人類学

キーワード：インド　NGO　社会的養護　家族　コミュニティ　アフターケア　ケアリーバー　アイデンティティ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｆ－１９－１

## １．研究開始当初の背景

本研究の対象となるのは、子どもの頃に故郷を離れ、ストリートチルドレンを支援するNGOの児童養護施設「子どもの家」（仮）で生活した経験のある1980年代後半以降に生まれた若者たちである。「子どもの家」は、施設に暮らす子どもと職員、ボランティアなどを含めたNGO関係者を「ファミリー」と称している。施設を出た後も、若者たちは施設出身者と同居・近居している場合が多く、日常/非日常を共に過ごす「家族」的な関係を維持していた。

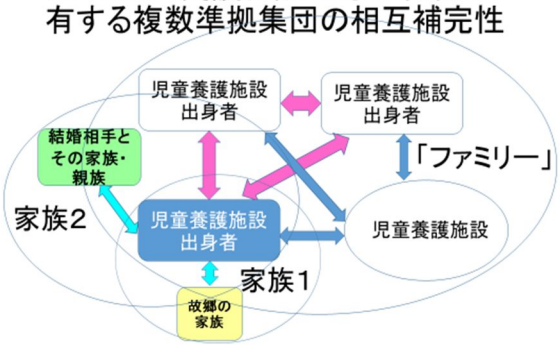
施設で暮らした若者の多くは、施設を出てからも教育や就職の面で NGO の支援を受けており、子どもの頃に家出という形で途絶えた故郷の家族との関係を、施設を出た後に仕送りや都市への呼び寄せなどをすることで再構築していた。家族・親族に頼ることのできない出身者たちは、NGO職員や出身者との間に共同的関係性を築き、施設で身に着けた学歴や技能に基づき経済的基盤を得ていた。

現在規制が緩んだとはいえ、インドでは見合い結婚が多くカーストが異なる相手との結婚は困難をともなうことが多いが、本研究の若者の多くは異カースト・異宗教間で恋愛結婚を行っていた。こうした結婚の際には、NGO 職員や出身者が相手の家族の説得に一役買い、儀礼の際には家族の代替的役割を果たしていた。また、故郷の家族も儀礼に参列し故郷でも儀礼を行う場合もあった。都市的な人間関係や就業スタイルに慣れ親しんでいる施設出身者たちは、それを共有するNGO職員・ボランティア、出身者から成る「ファミリー」とカーストや宗教といった伝統的価値を有する故郷の家族という二つ以上の複数の準拠集団を得て、共同的関係性のネットワークを深化・拡大させつつ新しい「家族」を創造しているという意識をもっていることがうかがえた。

他方、故郷に家族がいない、あるいは故郷の家族との関係を修復できない若者のなかには、NGO関係者との間で共同的関係性を有しつつも、親密な関係性構築に困難を抱える者もいた。若者らがあってほしかった/あるべき家族として想像する家族のイメージが、親密な関係性構築を困難にしていると考えられた。

そこで本研究ではインドの児童養護施設出身の若者たちを事例として、「家族」に関して揺らぎを持つ若者たちの家族イメージがどこから来るのかという家族を想像する仕組みと、いかなる人々といかなる家族関係を形成しているのかという「家族」を創造するプロセスを明らかにし、若者のアイデンティティ形成における「家族」の意味について考察することとした。

図1. 児童養護施設出身の若者が有する複数準拠集団の相互補完性




## ２．研究の目的

本研究は意図的働きかけとして体系的に教育されることがないにも関わらず、個人の意識と行動に大きく作用する家族イメージの調査と、実際の家族関係の調査を同時に行うことで、意識としての家族イメージと、実際の家族関係の相互関連性を解明することを目的とした。

現実に経験した家族関係に準拠することが難しい若者たちが家族をいかなるものとして想像しているのかを明らかにすることで、「家族」の規範がどのように学習されるのかという仕組みの解明に貢献することを目指した。また、こうした若者たちの家族形成を彼らが家族と認識する共同的関係性にまで広げて解釈することで、新しい「家族」の創造について考えることとした。調査は若者の生活の観察も行い、インタビューにおける語りを彼らの生活の文脈に即して解釈することが可能となること、意識と行動のズレをも考慮して彼らの語りの意味を明らかにすることが可能となると考えた。

## ３．研究の方法

本研究では、以下の三点についてそれぞれの手法で明らかにした。

①社会的養護を受けた経験のある者（ケアリーバー）の現状と問題の把握

インドでは９割以上の労働者が、法令に登録されておらず税金も払っていないインフォーマルセクターに雇用されており、保険や年金などの社会保障制度は脆弱である。より高いレベルの教育を受けることや資格取得を目指して勉強するなど、働きながらより良い職を求め続ける低階層や貧困層出身者の若者は少なくない。教育が長期化し雇用問題が深刻化するなか、児童養護施設で教育を受けた若者が、施設を離れた後に経験する支援の欠如と困難が問題視されている。2015 年に制定された「子どものケアと保護法」の内容や同時期に NGO を中心に取り組まれ始めたアフターケア（社会的養護を受けた若者が施設を出た後の支援）の経験や施設出身者の生活実態について、NGO や政府の報告書を中心に整理を行った。

②社会的養護を受けた経験のある若者の「家族」のイメージと婚姻により構築する家族関係

申請者は 2008 年に児童養護施設を出た若者たち 13 名を対象に結婚観に関するインタビュー調査を行った。当時 20 歳前後の若者たちのなかから、継続してインタビューが可能であった若者を対象に、結婚歴のある者に対しては結婚に至った経緯、現在の家庭生活と今後の見通し、未婚の者に対しては結婚について考えていることや、家族からのプレッシャーの有無について、また、全員に対して故郷の家族や施設出身者や関係者など親密な関係をもつ人々とのケアする/ケアされるといった具体的な関係について、参与観察やインタビューを行った。未婚の施設出身者の多くは出身者同士で居住を共にしており、日常生活の面での相互扶助の単位、結婚儀礼や宗教的行事を共にする非日常的儀礼の単位ともなっている。施設出身者の若者を対象に日常/非日常の場面の観察、インタビューを行い、結婚して形成した家族/親族、施設出身者、NGO 関係者との関係について知見を得た。

③社会的養護を受けた経験のある若者の血縁家族/親族との関係

申請者は、インド南部の工学系私立大学に通う男子学生を対象に、進路選択に関わる語りを分析し彼らの社会関係の検討を行った（針塚 2013）。2012 年インタビューを行った 15 名のうち 5 名が上級公務員を目指し試験勉強のためデリーで生活していた（針塚 2017）。都市で生活するこうした若者たちは仲間と同居/近居をしていたが、宗教的儀礼の際には故郷の家族やデリー内の親族と共に過ごしており、日常/非日常を共に過ごす NGO 施設出身の若者とは性格が異なっていると考えられる。故郷に家族のいる施設出身者の多くは、電話連絡や帰省を通じて家族との関係を維持しているが、子ども期に長く家族と離れて過ごし、施設を出た後に、家族関係を再構築した者もいる。そこで、そのような出身者に協力を得て、若者の故郷に暮らす家族との関係の特質を明らかにするために、ビハール州（2019）とウッタル・プラデーシュ州（2023）において、彼/彼女らの家族・親族に対するインタビュー調査を行った。

④社会的養護を受けた経験のある若者のアイデンティティ形成における家族の意味

現代インドでは、人々が伝統的規範から離れ、教育と就職の機会を求めてより広い親族関係そして知人・友人から援助を受けてライフチャンスを広げようとする動きがある(常田 2015)。児童養護施設出身の若者の想像/創造する「家族」について明らかにすることで、「家族」にゆらぎをもつ若者のアイデンティティ形成における「家族」とはいかなる存在であり、どのような人々との関係を意味するのかについて考察を行った。

エリクソンのアイデンティティ形成の理論では、アイデンティティ形成においてコミュニティが重要とされているが、「子どもの家」出身の若者のアイデンティティの形成においては、NGO の出身者や職員・ボランティアという関係者から成るコミュニティの存在が重要であると考えられる。

施設出身の若者の背景はストリートに住んだ期間や、血縁関係のある家族の有無など多様であるため、若者たちにとって重要なコミュニティを一様に決めることはできない。しかし、社会的立場、経済状況が安定していない移行期の若者にとっては、ケアする/されるという関係を NGO のコミュニティに頼っている場合が少なくない。そのため、施設出身の若者のアイデンティティ形成における家族の意味を考えるにあたって、NGO コミュニティの存在に着目し、若者が子ども期を過ごした施設の生活環境と教育、施設を出た後の施設出身者、職員、ボランティアの関係、若者が施設を出て得た社会関係についてもインタビュー調査を行い、若者のアイデンティティ形成の観点から関連を考察した。

## ４．研究成果

本研究ではインドで社会的養護を受けた経験のある若者たちを事例として、「家族」に関して揺らぎを持つ若者たちの家族イメージがどこから来るのかという家族を想像する仕組みと、いかなる人々といかなる家族関係を形成しているのかという「家族」を創造するプロセスを明らかにし、若者のアイデンティティ形成における「家族」の意味について考察することを目的とした。

1980－90 年代に生まれ社会的養護を受けた若者の家族イメージや家族形成においては、子ども時代の施設での生活環境と教育方針の影響が示唆された。本研究の調査協力者である若者たちが施設で暮らし教育を受けた 2000 年代までは、NGO の数や規模も限られ、政府機関との連携は未整備だったため、NGO はそれぞれの方針で活動を行っていた。そのなかでも NGO に共通していたのは、「子どもの権利条約」を活動理念とし、なかでも、子どもの参加・決定を尊重する子どもの中心の考え方であった。

当時、インドの都市部で社会的養護を受ける子どもの多くは、近隣州から家出をしてきてストリートでの生活を経験していた。こうした子どもたちは路上生活をしながら、NGO のノンフォーマル教育を受けていた。ノンフォーマル教育の目的は、ソーシャルワーカーが子ども一人ひとりと信頼関係を築いて、子どもが大人の保護を受け入れる関係を構築することであった。「子どもの家」では、ソーシャルワーカーはノンフォーマル教育を通して子どもと共同的な関係をつくり、子どもが将来のことを考えた正しい decision-making ができるために、「自分で決めること」の価値を教育していた（針塚 2016）。

ストリートを離れて施設で暮らすようになった子どもたちは、宗教やカーストに関係なく、共同生活を通してコミュニケーションをすることを学んでいた。また、施設では教育を受けることが重視され、学校／ノンフォーマル教育(通信制)／職業訓練のいずれかを子どもが自分で選んで勉強することが推奨されていた。18 歳で施設を出るまでに何をするのか、施設を出て生活できる手段を自分で考え決めるように職員に助言を受けていた。子どもたちは施設の活動を通して国内外のさまざまな人と知り合い、英語の授業や芸術のレッスンなどへの参加の機会を得ていたが、これらの関係や機会をどのように継続・発展させるのかも、子ども一人ひとりに任されていた（針塚 2007）。

以上のように、1980-90 年代に生まれ NGO の社会的養護を経験した世代は、自律的な主体形成の教育を受けてきた世代であった。このことは、施設出身者のアイデンティティ形成と家族形成に影響を及ぼしていると考えられる。施設を出た若者の多くは、施設出身者同士近くに住んだり、一緒に住んだりして、出身者の誰かとケアし合う関係を持っていた。また、施設での生活を通して、異なる宗教やカーストの者との共同生活を経験しているため、家族・親族を形成するうえで宗教やカーストを重視する規範を相対化する意識を有していた。結婚においては、インドに現在も多くみられるお見合い結婚をして家族の選択・決定に従うのではなく、自分で結婚の相手や時期を決める恋愛結婚を高い割合で行っており、異なる宗教の者と結婚する例も少なくなかった。親世代の一般的な結婚のイメージを踏襲している者は少なく、家族形成においても自ら主導権を握っている意識や実践がみられた。

また、施設出身の若者たちは、施設を出た後に結婚し家庭をもち、故郷に家族がいるものはその関係を維持あるいは再構築していた。他方で、NGO において「ファミリー」と呼ばれていた NGO 施設出身者や関係者から成るコミュニティも、若者たちのアイデンティティ形成において重要な役割を果たしていることが示唆された。施設出身者へのインタビュー調査を通じて、若者たちは施設を出たあと NGO のコミュニティの外では、自分が何者か説明をすることや、施設出身者というマイナスイメージを払拭するに足るパフォーマンスの高さを求められるという意識をもっていた。そのため若者たちの多くが、施設出身者であることをオープンにすることには困難を感じていた。

施設出身者にとって施設に暮らした子ども時代をオープンにできるという意味で、NGO の出身者や関係者の存在は特別な意味を持っている。そのため、施設を出た後の移行期にある若者にとって、NGO のコミュニティとの関係は複雑であり、出身者や関係者から良い評価を得ることや良い関係を維持することは、アイデンティティ形成において重要な意味を持っていた。しかし、これらの若者たちにとって故郷の家族との関係や結婚した相手やその家族/親族、子どもとの関係とは異なり、NGO のコミュニティとの関係は施設を出て時間が経過するにつれて薄れていく場合もあることがうかがえた。施設出身の若者の家族を含めた社会関係の変化のなかで、NGO のコミュニティが果たす役割は変化する。しかし、施設出身の若者の多くが家族に代替するようなケア関係を含む NGO のコミュニティにおける自他の評価を気にかけている。近年は SNS の発達に伴い施設出身者や NGO 関係者の情報を常に得ることができる状況もあり、特に移行期にある出身者のアイデンティティ形成において NGO のコミュニティの及ぼす影響は少なくないことが示された。

### 引用文献

常田夕美子　2015「空間の再編と社会関係の変容―農村、都市、海外をつなぐ親密ネットワーク」、三尾稔・杉本良男編『現代インド６　還流する文化と宗教』51-72 頁、東京大学出版会

針塚瑞樹「ノンエリート高学歴者の職業アスピレーション―工学系私立大学卒業者の事例―」『アジ研ワールドトレンド』アジア経済研究所、8-11 頁、2017 年。
針塚瑞樹「第 6 章　インドにおけるノンフォーマル教育と NGO―デリー、ストリートチルドレンを対象とした教育実践と子どもの権利―」押川文子・南出和余遍『「学校化」に向かう南アジア　教育と社会変容』、昭和堂、197－220 頁、2016 年。
針塚瑞樹「インドにおける若者の進路選択にみる社会関係―タミルナドゥ州、工学系私立大学生の事例」九州大学大学院教育学研究紀要 第 15 号(通巻第 58 集)、73-89 頁、2013 年。
針塚瑞樹「教育開発におけるノンフォーマル教育の可能性 ―インドの NGO を中心として―」『九州教育学会研究紀要』第 34 号、35-42 頁、2007 年。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>針塚瑞樹 | ４．巻<br>24 |
| ２．論文標題<br>インドの初等教育普及過程にみる「子ども」の複数性 ： 英国統治期インドの教育政策の検討を中心として | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>子ども社会研究 | ６．最初と最後の頁<br>24-31 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>針塚瑞樹 | ４．巻<br>59 |
| ２．論文標題<br>映画にみるインドのストリートチルドレンの表象 ： 「子どもの権利」の視点からの検討 | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>別府大学紀要 | ６．最初と最後の頁<br>60-80 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>Mizuki Harizuka |
| ２．発表標題<br>Identity Construction for Youth after Leaving Institutional Care in Urban India |
| ３．学会等名<br>International Symposium　Youth in South Asia: Strategizing Life and Reshaping the Society（国際学会） |
| ４．発表年<br>2023年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>針塚瑞樹 |
| ２．発表標題<br>インドにおける社会的養護経験のある若者の生活戦略 |
| ３．学会等名<br>科学研究費「「不確実性の時代」の南アジアの社会変動―若者の社会対応を通じて」　第３回研究会 |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>針塚瑞樹 |
| ２．発表標題<br>ケアコミュニティの共同構築と「教育」―デリー、児童養護施設出身者の生存基盤とNGO |
| ３．学会等名<br>現代インド東京大学拠点「教育と社会」班研究会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>針塚瑞樹 |
| ２．発表標題<br>相互行為的な実践としてのフィールドワーク　インドストリートチルドレンを対象とした調査を通して |
| ３．学会等名<br>日本子ども社会学会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>針塚瑞樹 |
| ２．発表標題<br>路上生活経験のある子ども・若者の社会的包摂におけるNGOの役割―インド、ストリートチルドレン支援を行う児童養護施設の事例― |
| ３．学会等名<br>九州教育学会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>針塚瑞樹 |
| ２．発表標題<br>ケアコミュニティの共同構築としての「教育」　インド、児童養護施設出身者の生存基盤とNGO |
| ３．学会等名<br>教育人類学研究室20周年記念シンポジウム |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>針塚瑞樹 |
| ２．発表標題<br>「学校外の子どもたち」を対象とした教育の変遷 |
| ３．学会等名<br>日本南アジア学会設立30周年記念シンポジウム |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>針塚瑞樹 |
| ２．発表標題<br>「シンポジウム趣旨説明」 |
| ３．学会等名<br>日本南アジア学会設立30周年記念シンポジウム |
| ４．発表年<br>2018年 |

〔図書〕　計4件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>針塚瑞樹 | ４．発行年<br>2022年 |
| ２．出版社<br>集広舎 | ５．総ページ数<br>9 |
| ３．書名<br>「子どもの「自己決定」　ストリートの子どもたちの労働と教育から考える」『ヒューマンスタディーズ世界で語る/世界に語る』 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>針塚瑞樹 | ４．発行年<br>2022年 |
| ２．出版社<br>玉川大学出版会 | ５．総ページ数<br>6 |
| ３．書名<br>「インドにおける児童養護施設出身者の移行過程―施設を出た若者の教育と就業への支援とアフターケアの導入」『教育からみる南アジア社会』 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>針塚瑞樹 | ４．発行年<br>2020年 |
| ２．出版社<br>旬報社 | ５．総ページ数<br>25 |
| ３．書名<br>「インドの社会福祉」『新世界の社会福祉　南アジア』日下部尚徳編著 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>針塚瑞樹 | ４．発行年<br>2019年 |
| ２．出版社<br>新曜社 | ５．総ページ数<br>16 |
| ３．書名<br>「関係的権利論から見る基礎教育―植民地近代の遺産とグローバル時代が交錯するインド」」『子どもへの視角　新しい子ども社会研究』 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|